

いのちの水

二〇二一年

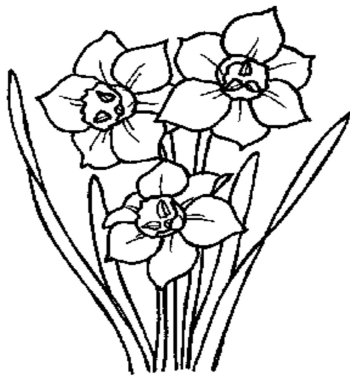
三月号

七二二号

私は復活であり、命である。私を信じるものは、死んでも生きる。生きていて私を信じる者はだれも決して死ぬことはない。(永遠の命を与えられる)このことを信じるか。(ヨハネ福音書11の25〜26)

目次

| | |
|--------------|----|
| ・祈りの泉 | 1 |
| ・愛は多くの罪を覆う | 2 |
| ・光の露 | 11 |
| ・勝浦 良明さんの思い出 | 14 |
| 石川 光子 | |
| ・勝浦さんの葬儀に | 15 |
| 貝出久美子 | |
| ・お知らせ 二人の方召天 | |
| 船井康弘兄、勝浦良明兄 | |



祈りの泉

今回ほど多くの方々の真実な祈りを受けたことはなかった

どなたが知らせてくださったのか分からないけれど、私自身は手術後も腹部全体やときには胃も痛みが強く、苦しい日々が続いて、夜もずっと眠られない状態だったけれど、その間でも、メールで折々に祈っています、ということや〇〇さんやその集会の方々が祈っています：など知らせてくださる方々があつて、痛みや苦しい状態でも、祈りが送られているのを霊的に感じる事が多かった。

この一月余りの入院期間にあつて、どれほどの方々が真実な祈りをささげてくださったことだろう。

いまから数千年も昔、神の霊を受けた人の詩が残されている。その作者は神の愛を深く知らされていたのがうかがえる。

神は、信じる人の悲しみを、その涙を一つ一つたくわえておられる、神様のお心に記しておられるのだと、知っていたのである。

：あなたはわたしのさすらいを数えられました。わたしの涙をあなたの皮袋にたくわえてください。

この「さすらい」と訳された原語(ヘブル語)は、ノード(nod)であり、この語の変化形は、兄弟を殺害するという大罪を犯したカインが、神から「お前は、さすらい者となる」(創世記4の12)と言われた個所に用いられている。

しかし、この詩編の個所では、深い悲しみゆえの魂のさすらいであり、人そのものがこの世の嵐に揺さぶられてきたことを意味していると受けとられるために、次のようにカトリックの代表的な英訳では訳されている。

あなたご自身は、私の悲しみの数々を数えてくださっている。

あなたの皮袋に私の涙を集めてください。

You yourself have counted
up my sorrows, collect my
tears in your wineskin
(NJB)

この詩の作者は、神が自分の深い悲しみと、その悲しみゆえの魂のさすらいをすべて一つ一つ知ってくださいているということを感じていたからこそ、このように祈り、願うことができたのである。

そのような受け止め方ゆえに次のように訳されているのもある。

あなたは私のあらゆる悲しみを見守ってくださいました。

あなたは、私のすべての涙をあなたの入れ物に集めてくださいました。

You keep track of all my sorrows. You have collected all my tears in your bottle. (NLT)

こうした原語によってより細かなニュアンスを知ることができ、これは神は、憐れみの神、慈しみの神であり、かつ真実な神である(出エジプト記34の6)と信じる者にとつて、おのずから導かれることである。

人の愛や約束はすぐに変質し、消えていく。しかし、神の愛は、変わらない。それゆえに、私たちの深い悲しみで魂が揺れ動く、苦しみの人生であっても、その悲しみを一つ一つ数えてくださる。しかし、その悲しみの現れである涙を神の心にたくわえてくださっているということを感じることができたのだ。

真実な祈りは、神と人への愛から生まれ、その双方に向けられる。そして神の愛は消えることがないゆえに、そうした祈りの心はま

た、神のお心の内に貯えられていてと信じていることができる。

今回の病気の私に対して向けられた多くの方々からの真実な祈りが神の愛によって清められて我が内にとどまっているのを感じる。

祈りもまた、たくわえられるものだと…。

そして、それは一つの泉となる。

愛は多くの罪を覆う

2021年2月9日 海陽集会でのメッセージから(これは、私が入院中で、ベッドにあって語ったことですが、ほぼそのまま教友によってテキストファイル化されたものを若干の修正と追加など加えたものです)

今日は、ペテロ第一の手紙の4章の7節〜11節の学びです。ここでは、次ぎのようないことが記されています。

①万物の終わりに関して
②互いに愛し合う、仕え合うことの意味

③それぞれの人にはそれぞれに賜物が与えられていること

④主の栄光

これらのことについて、この順ではありませんが、現代の私たちに對するメッセージとは何か、ということを与えられたいと願っています。

：万物の終わりが迫っている。だから、思慮深くふるまい、身を慎んで、よく祈りなさい。

何よりもまず、心を込めて愛し合いなさい。

愛は多くの罪を覆うからです。

あなたがたはそれぞれ、賜物を授かっているのですか

ら、その賜物を生かして互いに仕えなさい。

語る者は、神の言葉を語るにふさわしく語りなさい。奉仕をする人は、神がお与えになった力に応じて奉仕しなさい。

それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して、神が栄光をお受けになるためです。栄光と力が、世々限りなく神にありますように、アーメン。

(Iペテロ4の7〜11)

それぞれの人に与えられている賜物

まず、ペテロ第一の手紙の4章10節から見ますと、それぞれに賜物をいただいている。神様の恵みのよき管理者としてその賜物を活かして互いに仕えよということがいわれています。

どんな人でも、今日参加し

ているそれぞれの方々一人一人が、この世界や宇宙で唯一のそれぞれに賜物を、顔形にしても体の中身全体にしてもみんな違う。

その違う形で、これは植物の世界をみても非常によく分かります。葉っぱの一枚一枚から全部違うということですね。同じ大きな木の葉っぱ、数知れない葉っぱがあります。全部完全に同じというのは一つもない。

それぐらい神様は一方では多様性を、無限の能力がありますので、雲の動き、今日も病院の窓から朝も非常に綺麗な、下弦の月からだいぶたつて今は三日月状の、まだ夜明け前の暗い時に非常に赤くに三日月状に輝く月が見えておりました。次第に明るくなって青い綺麗な空です。その雲が様々な色合いを持って流れている。

そういう無限の多様性というものを神様は至る所で起こされています。

病気の方、生まれつき起き上がることもできない病身の方々もおられますが、そういう方々にまたそういう方がでなければできない務めを神様が委ねられているということを感じます。

私自身大学卒業まで障害のある方々とはほとんど全く出会うことはなかったわけです。中学の時から典型的な受験を目指すような学校であったため、からだに障がいのある方々はおられなかったもので、出会わなかったのです。

しかし、キリスト者となり、高校教員となつて、全日制高校勤務のとき、神様が特に夜間の高校に行くようにということを特に私に示され、校長に夜間定時制高校

に転勤希望を出すだけでなく、特別な理由があつて転勤希望する教員は、県の教育委員会に特別面接して希望を言うという制度を使つて、強く希望して全日制高校から夜間の高校に移りました。

その夜間高校は、非常に困難な問題―暴力に荒れ果てた恐ろしいような学校だったので、そこから様々な経験を与えられ、私の以後の信仰生活においても深い体験となりました。

その高校には、一般の高校に進学できないから、夜間高校に入ったという生徒から、すでに何年も前に中学卒業しているが、家庭事情から高校に進学できなかったもので、仕事をしながら夜間の定時制高校に入学希望し、昼間は朝から仕事をし、終わってから夕方に夜間高

校に出向いて夜の9時まで授業をうけ、それから帰宅して夕食、入浴、宿題、勉強：等々をこなすという相当地に困難な生活を自発的に選んで入学してきた向学心の旺盛な人たち―その中には、過年度卒業でもう20歳を大分超えた方、ときには、50代、60代の方もおられました。

他方、すでに述べたように、勉強でなく遊び仲間を求めて、学校で酒を飲んだり騒いだり、授業妨害をするために入ったような者までいたわけです。

また、中にはどのような薬も合わず激しい発作を起こすてんかんの方がおられ、そこで初めて、階段から落ちて、泡を吹いたり、教室や廊下で何度となく倒れる。そういう障害を持った養護学校から来た生徒さんもありました。

そのような高校勤務を6年ほどしたとき、それまで全く接することもなかった、一人の全盲の方を大阪のある女性の歯科医の方から紹介されて、ともに聖書を学ぶように導かれました。

その盲人女性のために点字をすぐに学ぼうと思つて県立盲人センターに出入りしてたら、新たにもう一人、その盲人センターの図書担当の人から、私の自宅近くにある養護施設と養護学校が併設された学校で、全盲と足の障害がある二重障害の方のボランティアで点字教育をして欲しいということとで依頼された。

そういうことがあつて盲学校へ神様が行くようにという促しを強く感じたので、盲学校に転勤希望を出し、更には2年前の「いのちの水」誌11月号にも書いたように、いろんな経緯から

う学校に転じて、聴覚障害者の方々の教育に初めて接することになりました。

盲学校にも、ろう学校にも重複の障害―知的障害、体の障害、聞こえないという障害、様々な方がおられて実に多様な障害を持った方々、そしてそのご家族の方々とも関わるようになって、そういう方から本当に様々なことを健常者から学べない、健常者の知ることのできない世界を知らされたわけです。

そういうふうにいるんな障害をもつた方々、私にそれぞれの方々が、様々な神様のなさり方を知らせてくれた。そういう方々から得難いものを学んだということなんです。そういうこともあつて集会には視覚障害や聴覚障害の方それから勝浦良明さんのような全身障害の重度の方もおられて、

そういう方々が皆独自に我々の集会に様々なよきものを提供し続けてくださつてきた。

それは我々の集会の方々皆感じてることだろうと思います。そういうことで皆その病気や障がいなどで弱いなら弱いなりに、健康ながら健康なりにいろんな賜物があるということ、それを生かして互いに仕え合うことの重要性を、集会に集う人は自然に知らされてきたわけです。

仕えるということ、互いに愛し合うこと

イエス様は罪人のため、世の人に仕えるために来られたと、記されています。

それは、昔の家来が主君の言うままに従うように、世の人の言うままに仕えて従うというような意味では決してなく、かえつて世の人

のまちがいをきびしく指摘し、つねに最善のものを与えようとされたのでした。傲慢な人にはきびしく言うことがその人にとって最善

のことであるゆえにそのように語られ、また自分がどうしても正しい道、愛や真実の道を歩めない(罪を犯してしまう)と感じている人には、歩むための力と導きを与え、最終的には万人の根本問題である罪の赦し、罪からの解放と、死にうち勝つ復活の力、聖霊を与えることのために、みずから十字架にかかられて死んでくださったのでした。

それは最もよきものを絶えず与えようとするのであって、この仕えるというイメージは日本ではあまり良くないですね。妻は夫に仕えろ、

会社員も上司に仕えろとか言ったり、そういうことで言ったとおりになることを

連想してしまします。

奴隷が主人に仕えるとか言った感じですね。あまりよい感じのない言葉ですけど、しかし、聖書的には、そのような意味とは大きく異なる意味で用いられていて、仕えるとは、相手に最もよきものを絶えず提供することが本当に仕えることだと。

ですから誰しもできることは誰かの様々な状況をより詳しく知った上で、その人に神様の力、様々なよき力、あるいは大きな罪を犯した人にもその罪を赦す神の愛が分かるように、そして聖なる力と御言葉を与えられるようにと、そのように祈る力は、キリスト者すべてに与えられている最大の賜物です。

互いに愛しあうとは、互いに祈り合うということと深く結びついていきます。

主イエスも、「敵を愛し、

迫害する者のために祈れ」と言われましたが、その言葉は、愛と祈りが同じものであることを示しています。キリストの言われた「愛する」とは、好きになるということでは全くなくて、相手がいかにも悪くてもその悪が除かれてよき心となるようにと祈る心であり、よき人、能力のある人に対してはそのよいところがさらに神の国のために用いられるようにと祈ることです。

万物の終わり、死への備え
そして、この7節から8節の「万物の終わりが迫っている」という切迫感をこの世代の信徒たちは皆持つておられたわけですね。時間というのも主の内にあれば千年も一日のごとくと、本当に主の霊に浸され時間や

空間を超えると、こうした

オンラインによる集会も遠い距離、近くの人もおられますが、そうした時間空間を超えてどこか不思議な一つという霊的な一体感を与えられると、これは聖霊が働くとそのように距離とか年齢とか障害とか様々なことを超えて結びつけてくださることを思います。

ですので、万物の終わり、これは最終的には神様の御計画で、私たち人間の普通の意味の科学的な考えや理性的考えでは、理解できないことです。

言葉に限界があつて「万物の終わり」というような私たちのあらゆる経験を超え、時間空間を超えたようなことは、到底私たちが使っている言葉では表せないわけです。

言葉は、たいてい身のまわりのこととくくに目に見え

ることを表すのを中心としているのであって、例えば、美しい夕焼けの風景や、自然の奏でる大木の風にそよぐ音、台風のときの山々の樹木たちの奏でる壮大な音楽、高山に咲く特に美しい花々や、そこからの山々の広大な景観：等々、それらから受ける感動とかは、到底言葉では表現できないし、苦しみや悲しみにしても、その程度が深く死のうとすほどの気持ちなども、到底言葉には入りきららないのです。

そのような身近なことであっても言葉の限界が強く感じられるのですから、「世の終わり」「新しい天と地」などという、私たちの日常生活の言葉をはるかに越えている状況のことは、到底言葉では表せないのは、当然のことです。

人間の思いや目に見えるも

の、そういったものに言葉が付いてるわけですが、人間の思いや目に見えることをはるかに超えている出来事なので、どんなに言葉で言ったってこの世の終わりなどというスケールの大きいことは、理性とか科学的考えなどでは分からないことです。

ちょうど死後の世界というものがこうした目に見える言葉とか人間の思いや考えや理性や科学を超えているから死後の世界はどんな言葉でも表現できないのと同様です。

復活のキリスト、それを有限な言葉で言えば無限の愛とか清さとか力、そうした言葉で表現するしかない。

でもその愛ということにしても、圧倒的多数は男女間の愛、親子の愛、友人の愛：そうした愛を思い出してしまう。しかし、神様の愛

はそれらから無限に遠いわけですね。

しかし、その無限に深く広い神様の愛のほんの一部を私たちキリスト者は実感をさせていただいたゆえに、キリスト者になったと言えます。

普通一般の人にとっては、十字架のキリストとかいっても二千年も前の、よく絵に出てくる姿であり、現代の自分たちには、何の関係もないことだと圧倒的多数の人は思っています。

けれども、キリスト者というのはあの十字架のイエス様が最も深い魂の内部に働きかける力であり愛であるということを実感した人だといえます。

私たちにも、聖霊が与えられて、そのような無限の神の愛に触れるとき、時間を越える翼を与えられたようなもので、世の終わりとい

うのが近づいていると感じる。

個々の人間にとってこれに近いのは死ということですね。死ぬとその人にとって一切のものがなくなる時ですが、世の終わりには裁きがある、と主イエスも言われています。

世の終わりでもなくとも、個々の人が死ぬときには、次のようにやはり裁きを受ける」と記されています。

：なぜなら、わたしたちは皆、キリストの裁きの座の前に立ち、善であれ悪であれ、めいめい体を住みかとしていたときに行ったことに応じて、報いを受けねばならない。(Ⅱコリント5の10)

：人間にはただ一度死ぬことと、その後に裁きを受けることが定まっている：(ヘブル書9の27)

「身を慎んでよく祈れ」
(Iペテロ4の7)と書かれてありますが、身を慎むとはどういうことなのか、わかりにくい表現です。

これは英訳の一つを見るとその意味に少しでも近づくのを感じます。すなわち、
keep mind calm, sober.
とあります。

*calm*というのは静けさですね、心を静かに保つてそして祈りのために真剣であれということになります。身を慎む、一体どういふことが「身を慎む」であるのか、それは、絶えず静まって主を仰ぐ、そういう姿勢を意味しているわけですね。

ですから、これは当然祈りということに繋がっている。私たちの基本的な生活は絶えず祈り、何を見ても、朝、美しい風景を見ても、青い空を見ても、喜ぶ人を見ても、悲しむ人を見ても、絶

えずそこに祈りがなされるようにと神様は導かれていられると感じます。

こうした病院にいても、多くの方々が、夜も眠れないで電気が点いているところがある、病室が開いているときにちらっと見えますが管を入れたままずっと不自由な生活をなさっている方々、特に今は面会禁止なので親族が来ても会うことも許されない、会ってお喋りしていたら万一来訪者、家族が感染させるといけないということでは会わせて話すこともできない。必要なもの―衣類などを持って来た看護師さんが、病室まで持ってきてくれるということなんです。

そういうことでこれで信仰を持たない方々はいっそう孤独な思いをされていることであろうし、また、私も緊急入院、手術で、急を要

する状態になっていたから、日赤病院に急ぎよ入れてもらったけれど個室も最初空いてなかったんです。それを特別室に仮に入れてもらって2日後に個室が空いたからと、10日あまりいたけれど十分よくならない苦しい状態があつて、こんなことで転院できるのかと思っただけです。

食事は10日ほど全くといってよいほどできなかったの、でだんだん衰弱していつても足が震えるとか血圧がとて低くなる、膝から下部にかつて一度もなかった水がたまつてぶよぶよになっているとか、歩くと頭の芯の部分に重い痛みを感じる：等々、ほかの症状まででてきたわけですね、これも、食事ができず、栄養が摂れなかつたからだろう。

それでも、転院することになったわけで、都会であり

まずと救急の者が入ろうとしてもいっばいだ、あちこちたらい回しにされて私のような急性の者ですとそのまま放置されたら死んでしまうところであつたということと言われましたが、今このことで医療崩壊にでもなれば、突然私のような病状になった者は生きていけなかつただろうと実感させられたわけです。

愛は多くの罪を覆う
愛は多くの罪を覆うと、誰の心にも、ふと心に留まる言葉だと思われまふ。

たしかに、最も多くの罪を覆ってそれが無きかのようにしてくださった、完全にいわば覆っていた、これはキリストの十字架だつたわけですね。

キリストが、十字架で私たちのために死んでくださったことによつて、私たちの

実に数しれないさまさまの罪が赦されるといふ驚くべき道が私たちに与えられました。

たくさんの様々な愛が足りない、祈りが足りない、言うべきことでないことを言うてしまった、傷つけた、配慮が足りない、正しいことはちゃんと教えていない、あるいは自分の何となく傲慢さが出てしまったとか、家族に対しても、親族、集会関係の方々に対して、あるいは私であればかつて教えた生徒さんたち：どこをふりかえっても数々の罪を犯してきたの感じます。それを全部、あたかも罪なきように覆ってくださる、そして消してくださり、赦してくださる、本当にキリストの愛は数えきれない深い罪を覆ってくださって、あたかも無きかのように扱ってくださると思います。

そういう愛を少しなりともいただく、他者の罪を知ってもそれを取り出して他者に告げ口したりしないで、その罪がどうか神様によって赦され、その人が神様に立ち帰るようにといい気持ちで見つめますと、その人の罪を覆うことになる。

そして、また、祈る側の者にとつても自分の罪が、どこかそういう真実な気持ちで祈ると自分の罪をどこか洗われていくような気がする。

神様の愛というのは不思議な力があつて、ほかの手段ではいかなることをしてもどうすることもできないけれども、内部の霊的な部分まで不思議な覆う力がある。反対に憎しみ妬みは罪の力を余計に掘り出してしまふとサタンが喜ぶと、誰かの悪いところを取り出して他者に言ったりすると自分の

心も裁きを受けて汚れていく。取り出された人はまたそれを誰某がそう言っていた、そういう悪口みたいなことをやるといつそうその人の心は新たな憎しみや怒りや悲しみになると。

罪というものは愛をもって覆う、赦すとかその人の悪い心が清められるようにとの祈りがなかったら、罪を取り出すとかえってサタンが喜ぶということをおぼわされます。

この「愛は覆う、罪を覆う」ということの重要性は、はるか昔、あのノアの記事に既に現れています。それは創世記ですね。ノアが救われた。箱舟に乗って救われたその後の記事です。

ノアのように特別に神に恵みを受けて救われた人であっても、農夫となりぶどう畑を作って生活が安定した時に、ノアはぶどう酒を飲んで

で酔っ払ってテントの中で裸になつて寝ていた。

その息子の内ハムは自分の父のノアの裸を見て外にいた二人の兄弟に告げた。兄弟の内、セムとヤフェトは着物を持って自分達の肩に掛け、後ろ向きになつて歩いて行つて父の裸を覆った。二人は顔を背けたまま父の裸を見なかった。(創世記の9の18)

ここには、人間の心の中で起こることがよく表れていると思います。誰かの悪い所を人に向かつていろいろと告げるといふサタン的なこと、自分も告げられた人も、聞いた人も皆が悪いものを受ける。

ところがこういうあえて知りながらもその罪を覆おうとする、そこにキリスト様の大いなる十字架の皆の罪を覆ってくださるということのいわば予言的な行動です。

セムの神、主をたたえよ。
 カナンはセムの奴隷となれ。
 カナンの父ハムからカナン
 が産まれてこのような罪を
 暴こうとするような愛の無
 き態度は何者かの奴隷とな
 るということの象徴だと思
 います。

サタンの奴隷になる。この
 セム族というのは後のイス
 ラエル民族に繋がることで
 セム族が祝福されたものにな
 るという、神の民になつ
 たと、そういう非常に大き
 なことに繋がるということ
 が暗示されています。

「この世は様々な罪、悪、汚
 れに満ちているけれども、
 それを単に嫌ったり、嫌悪
 感を持つたりするだけでな
 くて、それを覆う、神様の
 愛を受けるとそういう汚れ
 たところに神様の聖霊が、
 聖なる風が、命の水が流れ
 るようにと、今賛美した
 「あまつましみず」の歌

(讚美歌二一七) にありま
 すが、そのような心で祈り
 の心を持つとそうした様々
 な種類の汚れを覆うことに
 なるということを思います。
 そう言う意味で、愛は多く
 の罪を覆う。(*)

(*) 「覆う」の原語(ギリシヤ
 語)は、カリユプトー。聖書に黙
 示録という名の書がある。それは
 ギリシヤ語では、アポカリユプシ
 スで、アポ外す+カリユプトー…
 覆うなので、「覆いを外す」す
 なわち覆いはずして見えたこと
 聞くことができたことを記した書
 という意味。原語には「黙する」
 という意味はないので、「黙示録」
 というより、「啓示録」(啓いて
 示す)と訳すのが本来の意味を伝
 えている。「黙示録」は、英語で
 は Revelation ですが、これも Re-
 + veal であり、ベールを外す、
 覆いを取るという意味。

愛は全ての罪にベールを掛
 けて、あたかも無きように
 してくださる。愛という
 普通は優しくしてくれ苦し
 い時に励ましてくださると、
 そういうことだけは誰でも

分かりますけれど、人間の
 持っている非常に忌まわし
 いことや悪いこと、汚いこ
 と、そういったものを覆う
 力があるなどということは、
 普通の愛というイメージで
 は思いも浮かばないような
 ことではないかと思えます。

栄光ということ

：すべてのことにおいて、
 イエス・キリストを通して、
 神が栄光を受けるためであ
 り、栄光と力は永遠に神に
 ある。(I。ペテロ4の11)

私自身が、神様が、イエス
 様が、さまざまの罪を覆つ
 てくださったということをし
 感じます。そしてこういう
 ことは全て最終的には神が
 栄光を受けるため、これは
 神様がなさっているのだと、
 様々な祈り合い、愛し合い
 は、愛を持って他者の罪、
 いろんな人の罪を覆う祈り、

そういうことによって神が
 栄光を受ける。

特定の誰かが偉いのではな
 くて、そういう良きことを
 させている背後にある神様
 の力があの人に現れている
 と、そういうことで周囲の
 人が神に目を注ぐようにな
 る。

神こそが愛や真実の源なん
 だと、そういうふうに神様
 の大いなる力、それも主の
 栄光といってるわけですけ
 れどそういうところに目を
 注ぐようになるためだと。

栄光と力は世々限りなく主
 に：これは、強調されてい
 る言葉なんですね。永遠か
 ら永遠へと、英語でいえば、
 glory and power for ever
 and everということになり
 ます。

「To him belong the glory
 and the power forever and
 ever . Amen .」

これは祈りでもありますが、

事実そのものを言っている
と受けとることもできません。
栄光と力は永遠から永遠に
神様のものだ、神様に属す
る。

この栄光という言葉を繰り返
返し言いましたが、これは

日本語では栄の光、光の側
面しか漢字からは思い浮か
ばないことが多いと思われ
ます。しかし、最初に言い
ましたように、神の栄光、
キリストの栄光とは、愛で
あり、命であり、自由であ
り、いろんなものを含んだ
意味なんですね。それは、
次のヨハネ福音書の冒頭の
個所からもうかがえます。

…言は肉体となり、わたし
たちのうちに宿った。
わたしたちはその栄光を見
た。

それは父のひとり子として
の栄光であつて、恵みと真
実とに満ちていた。

(ヨハネ1の14)

この個所は、ヨハネ福音書
の最初に記されていること
で、とくにヨハネ福音書全
体のメッセージを要約した
ものであり、とくに重要な
個所です。

それは、イエス様の本質を
表しているゆえに、このよ
うにヨハネ福音書の第1章
で出てきます。ロゴスとし
て世に生まれる前のキリス
トを永遠の神と同じ存在、
ロゴスという言葉で表現さ
れています。ロゴスが肉体
を持って人間として来られ
て、特に最初はイスラエル
の人たちに宿った。

そして私たちはその栄光を
見た。その栄光とはたつた
一人独自の神の子として神
と同じものとしての栄光で、
恵みと真実に満ちていた。
真実の原語は、アレーセイ
ア。

日本語で真理というと今

日では、科学的な真理、学
問的イメージが強いですが、
このアレーセイアというギ
リシア語は両方を包括した
意味なんですね、ですから、
この栄光というのは、ここ

では単なる輝きというより
も、愛、罪を赦す大いなる
恵み、そしてまた限りない
神の真実を意味しています。
人間はそういう罪を赦す愛
などどこにも持っていない。
罪だらけの存在だから本質
的にそれはできない。人間
は決してできない、科学技
術もいかに発達しようとも
罪の赦しなどは全くできな
い。

そういう大いなる愛、慈し
み深いキリストの本質が、
キリストの栄光という言葉
で表現されています。

キリスト者となったとき以
来、私たちがこのキリスト

の栄光―その計り知れない
恵み、愛、赦しの愛、恵み
と真実、完全な愛をもつて
おられるお方として信じ、
じつさいにそのような神の
愛の一部を注がれてきたわ
けです。

それは、人間世界や科学技
術などでは到底与えること
のできないものであるのは
それを経験してきた人なら
ば、直感的にはつきりとわ
かることです。

栄光というのはそういう意
味をもつてヨハネ福音書で
最初に書かれているという
ことです。そういうキリス
トの栄光を私たちが受け、
「求めよ、さらば与えられ
る」という約束の言葉にし
たがって与えられています。
神様の愛の、そのほんの僅
かであつても、神様の栄光―
神の真実、愛は、海のごと
き、無限にありますので、
私たちはほんの小さなしず

くのようなものを受けても、ほかのいかなる手段でも与えられない不思議な力を感じて、この信仰を続けられてきたわけです。

さらに、神様のそういう意味の栄光をいただいで、それを少しずつでも他者にも分かち与えることができたらと願っています。以上です。

光の露

人間のあるべき姿とはどういう状態になっていくことなのか、それについては、次のように記されています。

：わたしたちは皆、顔の覆いを除かれて、鏡のように主の栄光を反映しつつ、主の霊（聖霊）の働きによって、栄光から栄光へと、主と同じ姿に造りかえられていく。（Ⅱコリント3の18）

主の栄光、それは愛の光、命の光です。私たちの信仰がより清められていくときには、顔の覆いが取り外されて、鏡のように主イエスの栄光を周囲に反射するようになるということです。

たしかに、キリストへの信仰を長く続けている人は、どこか違ってくるーと感じます。

私が大学4年の6月に、初めて、キリスト教の集まり（内村鑑三の流れを汲む無教会と言われてきた集まり）に参加したとき、そこでの長時間の聖書講義というものには、あまりにも、創世記の細かな出典（資料）の説明があつて、全く初めてキリスト教の集会に参加した私にとっては、関心が持てなかつたし、心に残らなかつたのです。

しかし、大学の卒業研究と家庭教師のアルバイトでも時間が取れない状況に

あつて、少し続けて参加してみようという気持ちにさせたのは、老年の何人かのご婦人たちの表情やその態度、言葉遣いやその人全体からかもしだされる雰囲気、私がそれまであつてどのような老年女性とは異なるものをはっきりと感じたからでした。

それと、集会で讃美されていた讃美歌のメロディー、ハーモニイ、歌い方…といったものがまた、それまで聞いたどのような歌声とも異なる、天からの響きのようなものとして心に深くとどまったのを覚えています。

そしてその北白川集会に加わるきっかけとなったのは、その少し前に聞きにいったキリスト教の講演会にて「静かなる細き声」という主題で語られた講師のその聖句が不思議なほどに私の

魂の深いところにとどまり、直接にお話しを…と思つて、二日後その講師であつた富田和久氏（京大理学部教授）の研究室まで連絡先もせず訪問しました。

その先生は、研究活動の仕事であつたにもかかわらず、とても丁寧な対応をしてくださった。

そのときの表情、まなざしに独特の温かみ、真実さが感じられたのをそれから54年を経た現在でも思いだします。

それこそが、この聖句で言われている、キリストの栄光を反映している姿だったのです。

そしてそのような方々は、本人が実感するかどうかでなく、聖霊がその人たちの魂を次第次第にキリストの栄光―愛と命―に満ちたものとして変えていきつつあつ

たのだと思います。

このことに関連して、その「主の栄光」という言葉を

テーマとした賛美、今歌っていたら、「シャイン・

ジーザス・シャイン」(Shine Jesus Shine)には、

いまも忘れられないことがあります。

これは、「イエス様、輝いてください！」という賛美

ですが、以前ニュージラ

ンドに行く機会があつて、

その教会とか、実際に教会の牧師さんといろいろお

話をしたり、何時間にもわたつていろんな事を聴くこ

となどの経験が与えられました。

ある日の夜に、一人の信徒の家に、その家にあるピ

アノを使って、教会のピアノの男性の方がこれを

も住宅が隣と離れてるといふことで、ピアノ演奏も大きな魂に響いてくるようなものでした。

英語歌詞のままでもこの歌を周囲の人とともに大きな声で歌つたことを今でも折々に思い出します。

それは、ずっと前ですけれどもその印象が強く残つて

いるんですね。外国であつても、賛美によつて一つにな

るといふのを実感したので

す。

イエス様の栄光と、イエス様の愛の光が輝くようにと

祈りを込めて大きな声で精一杯、生のピアノ伴奏で非

常に低い音から高い音まで縦横無尽に弾くというよう

なピアノの達者な男性の方だったのを今も覚えていま

す。

一つの賛美も、時と状況に

おいて深く残るものだと感じて

いるところですよ。この歌詞にあるように「主の栄

光」という言葉の最も深い意味は、それが「愛の光」

だということですよ。

Lord the light of Your

love is shining (主よ、

あなたの愛の光は輝いている)

In the midst of the

darkness, shining (闇のた

だ中に輝いている)

Jesus, light of the world,

shine upon us (世の光な

るイエス様、私たちの上に

輝いて下さい)

Set us free by the truth

You now bring us (私たち

に今あなたがもたらして下

さるその真理によつて私た

ちを自由にしてください。)

Shine on me 私たちの上に

輝いて下さい Shine on me.

ところがこの「栄光」という言葉は、金メダルの栄光に輝く、連続ホームラン王の栄光に輝くといったいろんなこの世でのとても目立つこと、世間で大きく報道されるようなことに使うわけですね。

しかし、聖書における主の栄光とは、光という部分も

ありますけれども、本質的な意味は「この漢字表現では

とても表せない広くて深い意味を持っています。

それは、愛を持った光であり、闇を照らす光―それは

人の精神的な闇を照らす光であるゆえに、命そのものである。しかも自由を与え

る力でもある、そして心を燃やすものでもある、言い

換えると、罪にしばらく闇を赦しによつて除き去る

命の光、そうした全体が主の栄光ということですよ。

「)のような主の栄光が私た

ちの上に輝いている、そのことは、すでに主イエスより五百年以上前から、預言されていたことにも驚かされます。

：あなたの死者は生き返り、死んだ者も立ち上がる。死んで、砂塵のなかに埋もれたようになった者たちよ、目を覚ませ、喜び歌え。

あなたの露は光の露。
その露を受けた大地は潤い、死者の霊に命を与えるようになる。(イザヤ書26の19より)

祖国が、外国の大軍の攻撃を受けて多くが死傷し、町々は荒廃し、あるいは人々は遠い外国へと捕らわれ行き、逃げ去ったりして、もはや回復不能とみなされるほどになってしまったが、それでもなお、そこに神はその全能と愛の力を注いで、光を与え、同時に命を与えられるゆえに、「光の露」と

言われています。

このことは、イザヤからはるかに二千七百年ほど後の時代の我々においても、変わらぬ真理として響いています。

いかに罪や病気、あるいは戦争や自然災害等々で、打ちのめされ、滅びさつていくような弱者と見える者の上にも、今も「光の露」といふべきものが注がれています。

聖書の記された地域は、乾燥地帯であつて、砂漠が隣に広がっています。そのようなところでは、昼間は太陽の灼熱により、しおれ枯れてしまうほどであるが、そこに夜間の低温によつて露が多量に生じ、それが植物をうるおすようになります。

私たちも、この世にあつてはさまざまの問題によつて枯れてしまいそうになることがあります。

しかし、そうした我々の魂

の上にも光の露が注がれて、新たな命を与えられるようになっているといえます。

このような不滅の回復力が与えられるというのを、神からの直接の啓示によつて知らされて、その真理をゆるがぬ確信をもつて告げた預言者、そのような真理の深い洞察を与えられた人が存在していたことに、驚かされます。

さらに、二月号でも引用した次の聖句にも、主の栄光、命の光、愛の光がすでに輝いていることが、やはり神からの啓示として記されています。

：起きよ、あなたの光が臨み、主の栄光があなたの上のぼつたから

見よ、暗きは地をおおい、やみはもろもろの民をおおう。

しかし、あなたの上には主が朝日のごとくのぼられ、

主の栄光があなたの上にあられる。(イザヤ書60の1〜2)

イザヤという預言者は、他国からの侵略、戦い、破壊、多くの死傷者：という闇のただなかにあつて、主の栄光が昇つたのをはつきりと見たのです。

それは、思想とか、哲学とか、あるいは研究や経験とかでなく、それら一切を超えた神からの直接の啓示であつたわけです。

これは聖書の巻頭にある、闇と空虚のただなかに、神の言葉「光あれ！」というひと言によつてそこに光が存在するようになった、というこどもこのイザヤ書と同じことを言っています。

主の栄光は、人の魂を照らし、その雰囲気まで変えていく。そしてさらにそこから主の栄光が鏡のように、反射されて周囲にも及ぶ。

そのような主の栄光が、二千年前のキリストの降誕以来、この世界のあらゆるところに射している―ということを示しています。

科学技術や学問、大学教育や各種の研究機関などがいかに発達しようとも、人間の魂の闇に光をもたらすことはできないのは現代の日本や世界の政治や、貧困、紛争、対立などの状況を知るほどに明らかなことです。

私たちは最終的には一人になつてしまいます。病氣重くなり、老齢となり、何もできなくなつて死に至る―しかしそのような闇が確実に迫る状況になつても、なお、その闇を静かに、しかも力強く照らしてください。愛の光がある！

そうした不滅の存在を目に見えるもので象徴的に表すものが、夜空の星の光です。

いかに地上の混乱や雲が厚くかかつていても必ずその背後には、清い星の光が地上にそそがれています。

その深い霊的な意味ゆえに、不世出の詩人とまで言われるダンテが、彼の畢生の大作「神曲」の地獄篇、煉獄篇、天国編の最後に「stella (イタリア語の星 stella の複数形)」という言葉で終わっているのです。

本人が意識がはつきりしないようになるほど弱つてきても、なお、見放すことなく照らしている光が存在する―このことは、大いなる福音であり、喜びの知らせです。

勝浦良明さんの思い出

石川光子

2月21日に、突然に召された勝浦さんのことですが、コロナが収束すれば会いに行こうと思つていただけに、

また徳島大学病院へ行けばいつでも会えると思つていた存在であつたので心にぽっかりと穴の空いた状態です。十年ほど前には月に何回か装具をつけて構内の散歩も可能でしたのにそれもできなくなり、病室の中そのものが人生の全てでした。

それでも深く神さまとつながり、沢山の信仰の友と交わり狭い一室であつただけど寛い世界でした。

早くから天国を見つめ、毎日を大切に生きてと思われ

ます。
主人(*)が「車椅子友の会」で勝浦さんと知り合いつき合いから後に私も勝浦さんを知ることとなりました。

(* 編者注) 石川正晴氏で「いのちのさと」作業所の当時の代表。

あるとき、勝浦さんの病室に行くとき、それまで全く関心のなかつたはずのキリスト教関係の本があつたので、

星野富弘さんの本を差し上げました。

しかし、当時の勝浦さんは心が暗くその本は読む気がしなかつたようで、介護をされていたお母様が読んでよかつたといつて下さいました。

お母様は希望の見えない日々を過ごしておられたので、私が介護の大変さを思つてことばをお掛けしても、それ以上何も励ますことのできなかつた事を覚えています。

そんな勝浦さんは障がい者のツールとしてパソコンの便利さを知っていました。でもその頃は周りにパソコンの知識を持つている人が少なかつたのと同時に神さまのことをもっと深く教えて下さる方を紹介して、それによつて光を見いだして欲しいと思ひました。

そうした時に、徳島聖書キリスト集会代表の吉村さんのことを思いだしていましたが、吉村さんはお忙しい身であつたので、私はなかなか言い出せませんでした。

その頃、私は足に怪我をして一ヶ月余り自宅療養していたので時間がたっぷりあったので思いきって吉村さんに勝浦さんのことをお便りし、勝浦さんのことをお願ひした訳です。

私が怪我をしたことから、吉村さんに勝浦さんのことを知らせることにになり、これが怪我の功名でしようか。いえ神さまのお導きです。

吉村さんはすぐに会いに行つて下さり、その後勝浦さんは、聖書やキリスト教のことに關しての関心と知識を深め、いろいろな集會関係の方々との関わりが与えられ、讚美歌のデータ作成にエネルギーを注ぎだすなど、さまざまの平安への道を得られ、そのご愛勞感謝です。

勝浦さんの所を訪ねると、明るく話題豊富でいつも笑顔の嵯峨山和代さん(長い歳月を勝浦さんの介護で過ごされた)、やさしいお母

様、そして自分のことより私達夫婦が運営しているのちのさと作業所のことや利用者さんのことなど、勝浦さんが氣にかけていろいろと尋ねてくれました。

勝浦さんを見舞うことより慰められる事の多い私達でした。

勝浦さんは今は苦しみのない神さまのみ国で憩つておられる事を思います。

病室を訪ねると賛美歌をデータ化されていた姿が昨日のように思い浮かびます。

ご子息を二人も見送ることとなつたお母さまの悲しみ、長年付き添つて介護された嵯峨山さんのことを思われます。

勝浦さんの葬儀に

貝出久美子

(徳島聖書キリスト集會員、元徳島大病院看護師)

勝浦さんとの長い間の主にある交流を、神様が与えてくださったことを心から主に感謝します。

勝浦さんに会いに行くと

「おう、来たか」という温厚な笑顔をいつも向けて下さりわたしは、どれだけ、自分の悩みや困りごと、またうれしかったことなど聞いてもらったかわかりません。

勝浦さんと話をしていくには、そこに何か温かい風が吹いていました。

イエス様を信じているぬくもりの風です。

賛美の曲のパソコン入力による受けた恵みははかり知ることができません。

しかし、それ以上に、想像もできないほどの病の中で、なお回りに温かい風を送り続けてくれた、その力を思う時、イエス様の愛と慈しみをあらためて思われます。

想像できない厳しい幻肢痛で、痛み止めも聞かない時、勝浦さんはじつとイエス様の十字架の苦しみを思われしていました。

それは、同じ痛みを知らないうちには捧げることのできない祈りだったと思えます。

勝浦さんのいのちを受け取り、残されたわたしたちは勝浦さんを心に覚えて、勝浦さんから吹いていた温かい主イエスの風を、まわりに届けるものであれたらと願います。

お知らせと報告

私たちの長い間の集會員であり、信仰の兄弟であつた方々が召されました。

○船井康弘兄

2021年2月16日

博愛記念病院にて召されました。97歳

私が入院中で外出禁止、かつコロナのため、ご遺族だけでの家族葬となりました。後日、コロナの感染の危険性がほぼなくなつたところに集會場で記念会をすること

になりました。

船井兄は、県立三好病院長や、香川県の国立病院機構香川小児病院長などをされた後は、高齢でしたが車で日曜日の礼拝には折々に参加されるようになっていました。

しかし、怪我のために病院に移られてもお元気に過ごされ、去年に病院にお訪ねしたときは、漢詩の勉強会に参加していると聞かれ、漢詩でキリスト教のことを歌ったものが一つもないから作ったと言われて幾つかをみせてくださいました。そのように向学心の強い方でした。

奥様の船井万亀子姉は、戦後間もないときからの信徒で、徳島聖書キリスト集會に最も古くから参加しておられた方の一人でしたが、6年前の2月に召され、徳島聖書キリスト集會の主催で葬儀を行いました。そ

の最後の遺族代表の言葉で、たくさんの葬儀参加者を前にして、船井兄が次のように言われたのが印象に残っています。

「私は今まで宗教はみな愛が目的だから、どの宗教でもよいと思っていた。しかし、近年は折々に妻とともに徳島聖書キリスト集會にクリスマス集會や復活節の特別集會に参加したり、妻のことを思うにつけ、以後はやはり妻の歩んだキリスト教の道を歩むことに決心しました。」

○勝浦 良明兄

2月21日に長い闘病生活を終えて、徳島大学病院にて召されました。

葬儀は、本人の生前からの希望により、吉村孝雄が担当することになっていました。コロナのことと、私が入院中であつたのでしたが、オンラインでの開催を希望

されて、御言葉からのメッセージと賛美、祈りなどは私が行なう形となり、ご家族だけの家族葬として行なわれましました。

今月号には、勝浦兄、そして徳島聖書キリスト集會との関わりが生まれるものになった石川光子姉の文と、勝浦さんが入院していたのと同じ大学の看護師であつたために、私が集會員に勝浦さんのことを紹介して以来、とくに最初のころは毎日のように勝浦兄の病室を訪ねて勝浦さんと介護の嵯峨山和代さんとの交流を深めてお二人の信仰の前進にも関わっていたいた貝出久美子姉のオンライン葬儀のときの集會員からのひと言ということを読み上げたものです。

次号には、勝浦さんご自身が「野の花」文集に書かれた文を

いくつか掲載予定です。

○私の病氣―絞扼性イレウスーのための入院、手術に対して多くの方々の真実なお祈りを心より感謝です。

また、妻も私が入院中の2月中旬過ぎのころから食事がわずかしかできなくなり、痩せていき起きているのが難しいほどになってきて、そのことでも新たな困難があり、さらにご心配、お祈りをしていただくことになりました。幸いその後少しづつよくなって感謝です。なかなか、来信そのほかに關してお返事もできず、申し訳なく思っています。おゆるしくください。

○今月号はとくに妻の病氣のことも重なって、十分な時間をとることができず、校正もできなかつたのでミスや重複もあると思われませんが、そうした箇所あればお知らせくださいれば幸いです。